

1…戦い

嫌な風が吹いていた。

湿った生温かい風が体に絡みつき、髪を揺らす。

ただでさえ鬱蒼と茂る木々によつて光が入り込みにくいというのに、この曇り空のせいでまだ昼であるのを忘れてしまいそうな薄暗さだ。

晴れていれば森林浴には最適であろう景観だが、明るさだけでこれほどまで様相は一変する。それが森というものだ。

そんな薄暗い樹海の中を、一組の男女が歩いていった。

といっても、その服装は丈夫で動きやすい冒険服であり、少なくとも観光ではないということが分かる。そもそも、この場所は街道から徒歩で約半日ほどかかる森の中であり、入ってこようと思つて簡単に入つてこれる場所ではない。

「これは降つてきそうだな」

それまで黙々と歩いていった二人だが、その沈黙を女の方が破った。

肩より少し長い程度のブロンドの髪を後頭部でまとめ、赤茶色のローブと、同色のバンダナを身につけた少女だ。

体型としては十七歳の年齢としては一般的なくらいであり、ぱつと見では普通の少女である。しかし、一番の特徴はその瞳であつた。深い緑色のその瞳は、男性に負けることのないくらい強く真っ直ぐであり、男性のような口調も相まって、妙な男らしさを漂わせている。

「……ああ。これは早めに雨をしのげる場所を探さないとな」

答えた男の方は、ごく一般的な、どこにでもいるような剣士であつた。

180センチほどの筋肉もほどよく付いた体格で、軽鎧を着こなしながらも、大きな荷物を苦もなく肩に担いでいる。

黒くて短い髪を後ろに流し、少し垂れがちではあるが、はつきり開かれたその瞳は彼の快活さと人なつっこさを一番よく表現している。

その瞳を辺りに向け、男は雨宿りに都合の良さそうな場所を探す。

このような地理に明るくない場所では、雨が降ってからの行動は極力控えたい。体力の消耗を防ぐのはもちろんのこと、土砂崩れなどの災害に巻き込まれるのを避けるためだ。出来ることなら、そのまま今夜の寝床と出来るような少し広めの場所を見つけておきたいところだ。

見ると、少し離れた場所に岩場が見える。かすかに聞こえる音からも察するに、川があるようだ。うまくいけばちよつとした洞窟くらいは見つけられるかも知れない。

「イル、あっちの方に」

「川があるみたいだな」

金髪の少女——イルもその存在に気付いたようで、男の言葉が終わるよりも前にその方向へと歩き出していた。

その後ろ姿を見ながら、雇われているとはいえ、自分よりも五歳も年下の子供の護衛というのはどうしたものかと男は思う。いや、年齢はこの際関係ないだろう。少なくとも、年相応の女の子のようにもう少し可愛げがあればやる気も出るのだが、これでは男と二人

旅をしているようで、どうも納得が出来ない。

「……まあ金のためだしな。むさい男じゃないだけましかな……」

ぼそりと呟いた彼の声が聞こえたのか聞こえていないのか、イルは振り返り、立ち止まっていたため息をつく男を呼ぶ。

「どうしたバート。早く行くぞ」

前髪を掻き上げる彼女の仕草に、ほんの少しだけ女らしさを見つけたことを励みにして、バートは重い荷物を担ぎ直した。

「へいへい、今行きますよ。お嬢様……」

その溪流は深さが足首ほどで、幅もせいぜい十メートル無いくらいのそれほど大きなものではなかった。流れもそれほど速くなく、直接入ったとしても足を取られることは無いだろう。もつとも雨で増水すれば話は別だろうが、この規模から察するに、程度は知れている。

溪流の兩岸数メートルには、岩と砂利の地面となっており、イル達がいた側はそのまま森、反対側はちよつとした高さの崖が繋がっている。その崖の上は、他と変わらない森が繋がっているようだ。恐らく、地震か何かで断層が隆起したのだろう。このような崖なら、川に浸食されたりして出来た洞窟くらいならありそうだ。

辺りに響くのはせせらぎの音と、葉擦れの音、そして小鳥のさえずり。どれも心地よく調べを奏でており、それらを聞きながら、さらさらと流れる清流を見ていると心が落ち着く。こんな時でなければ岸辺に座ってずっと眺めていたところではあるが、今はそうも言っていない。

イルは辺りを見渡すと、バートに指示を出す。

「時間がなさそうから二手に分かれよう。」

私は上流を見てくるから、バートは下流を頼む」

その言葉にバートは少し眉をひそめた。

「おいおい、大丈夫か？」

モンスターが何かに襲われたらどうするんだ」

この辺はそれほど強いモンスターは出ないものの、彼女を一人にしておくのはいささか不安だ。

「まあ少しくらいは大丈夫だろう。」

それほど遠くへ行くつもりもない」

「うーむ：かなり心配だが：この際仕方ないか。」

何かあったら笛鳴らせよ」

バートはあまり乗り気ではないようだが、今にも降り出しそうな暗雲を見て渋々頷いた。ちなみに笛というのは、音楽用のものではなく、高い単一の音を鳴らすだけのホイッスルである。しかし、事前に鳴らすパターンを打ち合わせておけば、簡単な受け答え程度なら離れていてもできる。意外と使い勝手が良い道具である。

「ああ。なら大体二十分位でここに戻ってくることにしよう」

「了解。気をつけろよな」

バートは軽く手を挙げて答えると、下流へと歩き始める。それを確認した後、イルも上流へと向かった。

途中で適当に石が川から出ているところを見つけて対岸へと渡り、崖沿いにそれらしい場所を探しながらゆつくり歩いていく。足場は大小の岩がごろごろしており、気をつけないと足をすべらせて怪我をしないとも言切れない。

探すべきなのは、ある程度の雨が降って川が増水したとしても沈まない高さにあり、かつ雨風に当たらないような横穴。火が焚けるほどの大きさなら一番だが、最低限座って寝れるくらいのスペースでいい。

一応それらしいところはあるのだが、なかなか十分な大きさのものが無い。更に良いところがないかと探しているうちに、すでに二十分ほど経ってしまった。ここから引き返すと更に二十分かかる。早く引き返さなければと思ったその時だった。

ザザザザ・・・

何かが草を掻き分けて迫ってくる音。草と接触している部分が多いのだろう。密度が高く、かなりの速度で向かってくるその音の様子から、イルはそれをオオカミのような四足歩行の動物のものだと判断した。

どこから来ているのか。右は溪流、前後は岩場。なら残るは左上方の崖の上からしかない。

イルがその方向を見上げた瞬間、その草を掻き分ける音が消えた。同時に、大きな圧迫感と共に、巨大な黒いシルエットが彼女の頭上を飛び越える。

そのシルエットは、その大きさを推測される重量を感じさせることなく軽やかに岩場に着地し、連続した動作でもう一度跳躍、真逆に向きを変えてイルと対峙した。

イルの予想したとおり、それはオオカミの一種、ダイヤウルフであった。

「ダイヤウルフ……！」
イルは迷った。

普通であればすぐに戦うことを考えただろう。いくら彼女が戦闘が苦手であっても、普通のダイヤウルフ程度は倒せない相手ではない。しかし、今回はいささか状況が違った。まずは足場が悪いこと。下は大小の石が入り交じった不安定な岩場だ。高低差はそれほどではないとはいえ、走ったりする際には足場を気にする必要があるが出てくる。段差に足を取られて転倒する危険性も十分にある。

そして何より、そこにいたのが、「普通のダイヤウルフ程度」では済んでいないことだ。一般的な黒ダイヤウルフは体長がおおよそ一メートル。大きくても人間くらいである。しかし、そこにいたのはそれよりも更に三回りは大きかった。イルには既に大きさの感覚が分からなくなっていたが、ゆうに二メートルは超えている。頭の位置はイルの胸ほどもあり、下手をすればのしかからただけで死ぬんじゃないか、と思わせるほどだ。

どう見ても、相手はイルを標的としていた。となると逃げたところで意味はあるまい。ただでさえ足場が悪いというのに、足の速さではダイヤウルフに軍配が上がるのは当然なのだから。それにこの様子を見ると、このダイヤウルフはどうやら「束縛」されているようだ。となれば、ここで放っておくことはできまい。

「戦うしかない……か」

こんな時に限ってバートがいらないとはどうしたことか。これでは護衛の意味がないだろう。と、イルは心の中で舌打ちをした。もはや自分から別行動を提案したことなど、完全に忘れている。

だが実際は、彼女にはそんなことを考えている余裕など全くなはずであった。彼女自身は剣術も攻撃魔法もそれ程得意ではないのだ。強いて長所を挙げるとなると、ヒーリングや応急手当といった後方支援型の能力のみである。しかも相手は屈強な戦士でさえも尻込みするような巨大な黒ダイヤウルフ。一応冒険するのに必要な体力を持っているだけの、限りなく一般人に近い彼女が、どうやってこの相手と戦うつもりなのだろうか。

だが戦う意志がある以上、勝算がないわけではない。しかし、一人で戦うにはあまりにも分が悪い賭けになる。それでもなお立ち向かっているのは、それ以外に生き延びる可能性がないからだ。逃げたら確実に死ぬ。ならば少しでも希望が持てる、交戦という選択をする他ない。不安を隠すために震える足に力を込め、イルは前を、その黒い巨体を見据えた。

彼女は腰に差したブロードソードを抜くと、とりあえずは型になってきたかな、という程度の構えを取る。もともと、腰は引けているし、腕力が足りないのか切っ先も必要以上に下がっている。お世辞にもかっこいいとは言えない構えである。通常のものより幾分小さく、軽く作られているブロードソードでさえ、まともに持てていないことから、彼女の非力さが伺える。

彼女のその動きに反応したのか、ダイヤウルフは低くしていた姿勢を更に深く沈み込ませ、イルに向かって走り出した。イルの動きなどから、恐れるに足りない相手だと判断したのだろう。その動きに迷いは感じられない。

約五メートル。

一秒も経たずに距離が詰まる。

爪が岩を蹴る音、その巨体が風を切る音、低いうなり声。それらが空気の固まりとなつてイルへと襲いかかる。

それを、イルはスレスレのところで体を横にして避けた。すれ違いざまに、左手をその背中へと回そうとするが、ダイヤウルフの動きが速すぎて触れることが出来ない。

「ちいつ…」

一回目は失敗だ。イルはひとつ舌打ちをすると、距離を取ろうと後ろに一步飛んだ。その一步が致命的だった。

ダイヤウルフも着地と同時に体を捻り、間髪入れずに再びイルへと襲いかかっていた。

ダイヤウルフのバネを最大限使った一步に比べれば、イルの跳んだ距離などほんの些細なものだった。巨大なダイヤウルフは、距離を詰めるどころか、その一跳びでイルの頭を噛み砕かんとしていた。

イルは顔面めがけて迫ってきたその口を、剣を横にして両手で支えることでかろうじて受け止めた。しかし、自分よりも何倍も重量のあるであろうダイヤウルフの勢いまでは殺すことはできなかった。イルは、押し倒される形で背中から地面へと落ちる。

「ぐあつ…！」

下は固い岩場だ。運良く平たい岩の上だったからまだよかったが、受け身もとれずにいたため、その衝撃はかなりのものだった。頭は何とか地面にぶつけずに済んだが、背中に走った痛みはかなりのもので、なによりその衝撃で肺の中の空気が全て外に出てしまった。激しく咳き込み、意識も飛びかけたイルだったが、腕の力を弱めることはできない。その瞬間にのどを、いや頭を噛み砕かれるだろう。

左足を曲げて体の間に割り込ませ、少しでもかかる体重を減らすが、体格的にも身体的にもイルとは比べ物にならない巨大なダイヤウルフだ。押しのけるどころか現状維持ですらまともにできそうにない。現に今の状態で、少しずつ押し戻されている。

しかも、この両手が使えない状況ではこのダイヤウルフを「解放」することができない。まさに手も足も出ない状況だ。

そんなことなど、考えればすぐに気付く簡単なことだ。なぜ受け止める前に気付かなかったのか。戦場ではたった一つの判断ミスが死に直結するというが、今がまさにその状態だった。だが、今更後悔したところで状況は好転しない。ほぼチェックメイトなのだから。

目と鼻の先には、目を血走らせ、口から涎をたらした黒い巨体。その右前足がイルの鎖骨付近で爪を立てているせいで、激痛が走る。下手に動かされれば、周辺の肉ごと剥ぎ取られそうなくらい、その爪は深く食い込んでいた。

何ができる何ができる何ができる……！

パニックになりそうなこの極限の状態で、イルは必死になって打開策を考えていた。

このような余裕の無い状態では、攻撃魔法で都合良く相手を吹き飛ばせる事は出来ない。呪文詠唱なり精神集中をする余裕があつてはじめて、遠距離攻撃や威力を高めることが出来るのだ。今のような状態では、触れている物に低威力な魔法を通すくらいしか出来ないだろう。

なら、剣を媒体として電撃を放つたのだろうか。これほどの巨体をひるませるほどの威力は出せないし、そもそもそれ程の電撃であれば、同じく剣に触れているの方が危険だ。それを恐れて出力を抑えたとしたら、今度は全く効かないだろう。他の魔法も同様だ。

し、力勝負なんて考えるまでもない。改めて自分の非力さを実感する。つまりは、打つ手無しということだ。

「はは……」

自嘲。

自分は死ぬんだなと思った瞬間、世界は全く色を失い、非現実となった。

目の前にいるはずのダイヤウルフの顔が妙に遠くに見え、その息づかいも聞こえなくなつた。代わりに川のせせらぎの音だけがはっきり聞こえる。

絶望、なのだろうか。

いや、悲壮感はない。

あるのはただの無色の世界のみ。

：こんな世界も、悪くはないな。

イルは漠然とそんなことを考えていた。

その時だった。その黒の世界に、他の色が飛び込んできた。

赤。

目も覚めるような赤い何かが、イルの視界の端から飛び込み、彼女を覆っていたダイヤウルフにぶつかった。その衝撃音と共に、その二つの影はイルの視界から消え、同時にその音でイルの世界は色を取り戻した。

ガラン。

一瞬遅れて、イルの持っていたブロードソードが落ちる音が耳元で聞こえた。

その時視界に広がっていたのは曇り空の灰色。先ほどまで視界を覆っていた黒いダイヤ

ウルフはいなくなっていた。いや、そうではない。それはイルの左側、それ程離れていない位置にまだいた。しかし、その攻撃の対象はイルではなく、先ほどの赤い影に向けられているようだ。

痛む胸を押さえて、イルはとりあえず身を起こして距離を取った。そうして、ようやくその赤い影がなんなのかを判断する余裕ができた。

それは人間の子供であった。十歳くらいだろうか、小柄な体格で、真っ赤な髪を腰くらいまで長く伸ばしている。その映える赤い髪を見て、イルは赤い塊だと認識したのだ。

彼、いや、彼女だろうか。その子供は、自身の身長よりも遙かに大きいダイヤウルフと対等に渡り合っていた。と言っても、どちらも攻撃が当たっているわけではない。互いに軽やかな動きで攻撃をかわし続けているのだ。当の本人達はどうか分からないが、どちらも無傷である以上、イルには対等だとしか判断できない。

長くしなやかな赤い髪の束が、縦横無尽に動く少女に一瞬遅れて付き従う。その動きを見ていると、少女の動きがいかに無駄のない、川の流れるようななめらかな動作であるのかがよく分かる。止まることなく、まるで次の位置が最初から決まっていたかのような流れる赤。

焰の舞踏。

イルのイメージでは正にその一言であった。

こんな非常事態でありながら、彼女は少女から目が離せなくなっていた。驚くべきは、その焰の少女の身のこなしであった。

筋肉や骨格の関係上、当然肉食動物であるダイヤウルフの方が身体能力では上だ。バラ

ンスにおいても、二足歩行の人間よりも四足歩行の方に分配が上がるのは当然だ。しかし、そのような絶対的な差がありつつも、焰の少女はその身のこなしだけで、ダイヤウルフと互角に渡り合っているのだ。少女の動きは、掴もうとすればするりと指の間を抜けていく桜の花びらのように、巧みにダイヤウルフを翻弄していた。

いくら飛びかかっても攻撃の当たらないことに苛立っているのか、ダイヤウルフの注意は、その少女に移ってしまったように見える。

正直、今ならこのまま逃げ出すこともできるだろう。しかし、理由は分からないが助けてもらったことに違いはない。命の恩人を置いてこのまま逃げるなどできるはずがない。ましてや、戦っているのは自分よりも遙かに小さい子供なのだ。

しかし、戦闘では役に立てないだろう。それはさっきのことで十分わかっている。割って入れば、逆に邪魔になるのは目に見えている。

ならば、さっき失敗した賭けをもう一度するしかない。今度は少女がダイヤウルフの気を引きつけてくれる分、さっきよりも成功する確率は上がっているはずだ。それが自分にとって、そして相手にとって最良の選択だろう。

「…よし…！」

イルは決意を固め、汗のにじむ右手を握りしめた。

※

ゆらり、ゆらり。

その時少女の見ていた世界は、一言で言うなら色の濁流であつた。

岩場、そして曇り空の灰色、少し遠くに見える森の緑、目の前にいる敵の黒、そして自らの髪と、見知らぬ人間が着ている服の赤。

それらの色が、線となり、帯となり、視界を流れていく。今の少女にとって、判断する基準はその形ではなく色だけであつた。

赤髪の少女は、そんな目まぐるしく変動する流れの中、冷静に状況を分析していた。

黒の動きは直線的で、避けるのは簡単だ。いつものように動いていれば、その牙も爪も当たることはないだろう。しかし、避けているだけでは相手を倒すことはできない。体力的には当然劣るし、こいつは確実に「操られて」いる。となれば、途中で諦めてくれはしないだろう。逃げられないのであれば、当然倒さなければならぬ。

ならばどうやって、と考えるつつ、足が地面に付いたと同時に、彼女は左へと体を反らした。今まで体のあつた場所を黒い影が通り過ぎ、間髪入れずにもう一度飛びかかってくる。大きく開いたそのダイヤウルフの口を、閉じるように上から手で押さえつけ、同時に自分の体を上へと持ち上げる。体が美しくしなり、実際の動きよりもゆっくりと見える動作で、少女はダイヤウルフの真上を宙返りで飛び越えた。

黒と灰色が流れる景色の中、少女は視界に銀色の光る棒を認めた。赤と金の人間のものだろう。あれなら、この黒を倒せるはずだ。

そう判断した少女は、着地の勢いを殺さずに、飛び込み前転の要領でその剣を手にとった。

少女は、その剣が見た以上に重いことに戸惑った。長さも自身の身長の上半分はあつた。重心位置が変わり、かつ今までよりも自重が増す。そしてなにより、それ程の長さの物を振り回すと言うことは、今までのように簡単には動けなくなると言うことだ。片手、もしくは両手が塞がるわけだから、当然その手を他に使うことができなくなる。そこが心配だったが、少女はそれを使うより他に選択肢はなかった。他に決定打となる武器がないからだ。

できる。いや、できなくてもやるだけだ。失敗したら自分が自然に還るだけのこと。何も恐れることはない。強い物が生き、弱い者が死ぬのは当然の摂理だ。生き残るために全力を尽くし、死ぬときはそれを素直に受け入れる。それがこの世界でのルールだ。

自分が負ければ、あの人間も死ぬことになるだろうが、それは仕方あるまい。一度死んだも同然の人間なのだ。これ以上の心配をする義理はない。

グルル：

一筋縄ではいかないと判断したのか、ダイヤウルフは少し離れた位置で少女の動きを警戒している。対する少女は剣の構えなど知らないようで、剣を両手でもち、体の右側で引きずるようにして少し前屈みで立っている。

見ていたイルには、少女が剣をまともに使いこなせるようには見えなかった。少女が一体何者なのか分からないが、構えを見ている限り剣を持ったことがあるように思えない。もつとも、自分もかじった程度でしかないのだが、少なくとも少女の構えは、それを「棒」

としか見ていない。ある意味当たり前だが、棒をとはい、剣には方向がある。ただ闇雲に振り回しても決定打とはならないのだ。更に、いくら身のこなしが並はずれているとは言え、あくまで見た目通りの子供だ。身長に対する剣の比率があれほどあれば、相手に当てる以前に剣に振り回されるだけではないか。

イルは震えていた。

さっきは死を覚悟したものの、一度生き延びられる希望ができた今、イルには明確な死への恐怖が生まれていた。

心では、一見勝ち目のなさそうに見える少女に代わって、ダイヤウルフに立ち向かいたと思うている。しかし、それはあくまで建前なのだろうということも、イルは自覚していた。自分の方がよっぽど勝ち目がないというのは、さっきの立ち回りで明らかなのだ。

ここで小さなプライドや責任感で自分が出しゃばったところで、無駄死にするだけだろう。悔しいことだが、ここはあの赤髪の少女がダイヤウルフの気を引き、その隙に自分が「解放」するのが最善策だ。

イルはそう、自分にいい訳をした。確かに彼女の意見は、まっとうな戦士、例えばバートの様な人間も最善策だと判断するだろう。しかし、彼女のその考えの裏には明確な恐怖があった。冷静に出した策ではなく、あくまで自分の都合に合わせた後ろ向きな考えが、たまたま一般論と一致しただけにすぎない。

一方で、その恐怖を隠して、ともすれば逃げ出したくなるその足を、イルはどうかそこに止めることに成功していた。その言い訳は、前に出ることを免じる代わりに、後ろに退くことも許さない戒めでもあった。

しかし、そんなイルの葛藤などダイヤウルフが知るよしもなく、その森の主は、自身にとつて最良の選択をした。肉食動物というのは頭がいい。実力の知れない雄牛よりは、確実に倒せる仔牛を狙う。

ダイヤウルフは再び駆けた。そう。イルへと向かって。見た目では明らかに大きなイルを仔牛と判断したのは、何とも皮肉なものだった。

「しまっ……！」

完全に不意だった。イルは、ダイヤウルフの気は完全に赤髪の少女に向いているものだと思っていた。

イルも少女も気に留めていなかったが、直線距離では少女よりもイルの方がダイヤウルフに近かった。少女にとつても予想外のことだったのだろう。声にならない驚きの声を上げ、それでもすかさず間に入ろうと走り出すが、ほんの少しだけ間に合わない。

武器もなく、意表をつかれたイルは、全く動けなかった。避けようなどという考えすら浮かばなかった。

イルが息をのみ、少女が駆け、巨体が跳ねた。

瞬間。

『詰めが、甘い』

イルの頭に、ダイヤウルフの牙ではなく透明な声突き抜け、それに疑問を持つよりも早く、轟音と閃光が辺りを包んだ。

岩が砕け、飛び散るほどのその衝撃で、イルは後ろへと吹き飛ばされた。

何が起こったのか。イルはそこまで思考が回らなかったが、赤髪の少女にはそれがなん

なにか分かっていった。落雷だ。イルの喉元をかみ切ろうとしたダイヤウルフに、小規模な雷が落ちたのだ。

ダイヤウルフが怯み、一瞬後にようやくたどり着いた少女が、走りの勢いを殺さないまま、その上を飛び越えながら手に持った剣を振り下ろす。確かにその剣撃はダイヤウルフの首の後ろを直撃したが、少女の力が足りなかったのか、それとも角度が甘かったのか、ダイヤウルフの体に傷をつけることはできなかった。しかし、それでもその打撃が決定打となったのだろう、ダイヤウルフは低くくぐもった声を上げ、ついに倒れたのだった。

しばしの沈黙。

飛び散った岩の欠片がばらばらと落ちる音が終わるころになって、ようやくイルは我に返った。実際は全く状況を掴めていなかったのだが、少なくとも、これがチャンスであることだけは分かった。

先ほどの閃光がなんなのか、ダイヤウルフは死んだのか、気絶しているだけなのか、それともただ倒れただけなのか、それらの要素は全く考えずに、ただそこにダイヤウルフが無防備で倒れているという事実だけを認識した。それだけで十分だ。

イルは、這うようにしてダイヤウルフに近づき、その首に横から抱き付くようにその手を回した。そして右手の掌をダイヤウルフの頭の後ろに押し当てる。歌のような呪文を吐きながらその手から魔力を送り、数拍後、その手を握った。そこには、どこから現れたのか、いつの間にか革製の巻物が握られていた。

それを確認すると、イルは崩れるようにその場にへたり込んだ。たったそれだけのことにかなりの魔力を使ったようで、肩で息をし、うっすらと汗をかいている。しかし、「解

放」は成功した。その安心感から、イルはへたり込んだまま、やっと辺りを見渡す余裕ができた。

まず、目の前のダイヤウルフは立ち上がる気配がない。しかし呼吸はしているし、「解放」もできたので、気絶しているだけなのだろう。先ほどの少女の攻撃もそうだが、その直前に光った閃光、落雷のようなものに対するダメージが大きかったようだ。命に別状はないだろうが、完治までには少し時間がかかるだろう。

そう考えると、イルは再びダイヤウルフの体に手を押し当て、魔力を注ぎ込みはじめた。目に見えた外傷がないのでわかりにくかったが、ダイヤウルフの呼吸が安定し、生気が満ちていくのが感じられる。イルは、今まで自分を襲っていたダイヤウルフを治癒しているのだ。

それに気付いた赤髪の少女が、不思議そうにイルを見る。そして、初めて言葉を発した。「そいつ…敵。………なんで…？」

年齢相応の、凜とした高い声。もともと、今はその声に不安をにじませている。「もう、敵じゃないよ」

イルは、少女の不安を取り除くように、ゆっくり、優しく答えた。

「このダイヤウルフは操られていただけなんだ。」

その原因は取り除いたから、もう大丈夫」

そういつて、右手に持った先ほどの巻物をひらひらと振って見せた。

少女は、イルと巻物、そしてダイヤウルフを交互に見比べると、納得したように頷いた。

「よし……大体こんなものかな」

一通りの回復が終わり、イルは立ち上がった。しばらくすればこのダイヤウルフも意識を取り戻すだろう。ふう、と息を吐いて額の汗をぬぐい、イルは少女の方へと向き直った。

「助けてくれて、ありがとう。本当に、命拾い、した……」

そういつて、イルは頭を下げた。いや、頭を下げようとして、体ごと前に倒れ込んだ。しかし、地面と接する直前に大きな手が、後ろからイルを抱きかかえた。

「……う？」

赤髪の少女は、突然現れた男を見上げる。怒っているのか、安堵しているのかよく分からない複雑な表情。額に汗を浮かべ、多少息が荒いところを見ると、随分な距離を走ってきたのだろうか。男は、イルをゆっくりと地面に寝かせながら、ダイヤウルフと少女を見比べ、ほぼ正確に今まで起こったことを把握した。

「嬢ちゃんがいっつを助けてくれたのか。ありがとうな。」

ホントは俺が守らなきゃならない役だったんだが」

少女が肯いたのを確認すると、今度は荒い息をしたイルを見る。怒鳴りつけたいのをぐつと我慢して、気遣いの言葉をかける。

「大丈夫か？見たところ大きな怪我はしていないようだが……」

ローブの胸元が少し破れて血がにじんでいるが、それ程大した出血でもないようなので問題ないと判断する。意識はあるようなので、痛がっていないところを見ると骨折などもしていないだろう。息づかいが荒いのは魔力の使いすぎによる精神疲労だろう。以前他の魔法使いで見たことがあるから、これもしばらく休めばすぐ元に戻るはずだ。とりあえずは大丈夫そうだ。

バートはホッと胸をなで下ろし、赤髪の少女へと心の中でもう一度感謝する。こんな巨大なダイヤウルフに襲われて、イルが生きていることすら絶望的だったのに、ほぼ無傷でいられたことは奇跡に近い。

「バート……か……」

イルはうつすらと目を開けてバートを確認すると、今にも死にそうな声で、

「役……立たず……」

そういうと、かくりと意識を失った。

「……………」

バートは拳を握りしめ、この川がこいつを流せるくらいに深くないことをとても残念に思った。

やはり、こいつと共にいるのは今回の仕事で最後にしよう。そう決意して空を見上げたバートの顔に、ぽつり。

「はあ……とことんツイてねーのな……」

雨が、降り出した。